

本文は尙ほ馬太傳の文句を追ふて進んで居る、尤もかゝる文句は馬太傳の外路加傳にも見えて居ることは好く知らるゝ所であるが、全體の上から見ればもとより馬太傳に相當すべきものである、たゞ此の間上に對照した所によつても分るやうに、兩者悉く一致するのではない、これは聖書自身の相違もあるかも知れないが、また引用者の考によつて取捨したに因るとも考へられる。

序に上に擧げた所について二三の管見を附記して置く、凡そ此の時代に行はれた諸宗の經典には皆世間に周知せられた佛語を借りて來て用ゐたものであることは、前述の摩尼經について見ても明かなことで、道教の如きはその最も甚だしいものである。此經典でも最初に見ゆる世尊なる語の如きは(諸世尊なる語は二威蒙度讚にも出て居る)その一例で、これは聖書の文句を比較する迄もなく神の子 *Jesus* を呼ぶに用ゐたものである、しかしながらその次に會須^{カナラズ}遺^{ベシ}世尊^{セシム}知識^{ヲシテ}と記した世尊は *Jesus* では無くして別に天父を指したものと思はれる(四行目「一即放得」の一行も、「一神即ち天父を指したものに相違ない」父子一體とはいへ、少くともこの場合に於ては甚だ曖昧^{ルーズ}な用ゐ方と思はれる)。

新約書によると上に見た如く「右の手の爲^{なす}ことを左の手に知^{しら}する勿れ」と見えて居るが、此の卷には右と左とが反對になつて「若左手布施^{スルトキ}勿^レ令^ニ右手覺^{ヲシテ}」と記されて居る、思ふにこれは左右の文字の書き誤りに歸すべきものであらう。

客怒翳數の翳數 *Ishu* は波斯教殘卷及びスタイン氏蒐集の摩尼教禮讚中に見ゆる夷數と同様に、中期ペルシヤ語即ち *Pehlevi* 語の *yisô* (即ち *Jesus*) を寫したものと疑ないが、客怒 (*ko-nu*) といふのは何と讀むべきであらうか、汝知以下の十四字は勿論馬太傳には無く、論者が基督贖罪の事をこゝに挿むたのであるが、もしこれが